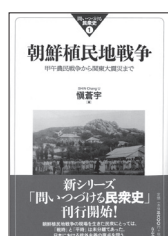


書 評 と 紹 介

愼蒼宇著

『朝鮮植民地戦争』

——甲午農民戦争から関東大震災まで』



評者：伊藤 俊介

1 本書の概要

本書は、日本の朝鮮植民地支配の過程で展開された軍事暴力と朝鮮民衆の抵抗運動、さらにはそれらの経験がその後に与えた影響について、「植民地戦争」という定義をもとに分析している。

序章「朝鮮植民地戦争とは何か」では、日本の朝鮮植民地支配をめぐる既存研究の問題点（植民地暴力の軽視、画一的な近代観の民衆への押しつけ、近代批判の視点の弱化など）を指摘し、それらを克服すべく、①植民地における軍事暴力の長期的・継続的な把握、②支配側と抵抗する側のあいだの「非対称的戦争」という性格、③支配側からではなく抵抗する側からの視点の重要性、という「植民地戦争」の定義を示し、①植民地戦争の理論と方法、②植民地戦争と日本社会、③植民地戦争と地域社会という3つの視点からのアプローチを試みるとしている。

第1章「朝鮮王朝時代における民衆反乱の鎮圧と刑罰——「賊徒」と「良民」をめぐる」

では、近代移行期の朝鮮王朝における刑罰のあり方とその変容をめぐる葛藤について論じている。儒教的民本主義のもと為政者が徳治と教化をもって民衆の要求に応える理想政治のあり方は、内憂外患に伴う社会秩序の混乱の中で「良民」への寛容と「賊徒」への厳罰という「中庸」的な刑罰論が論じられ、甲午改革で刑罰制度の改革が試みられた。だが、変革を求める東学農民軍を「賊徒」と見なし展開された日本軍と開化派政権の過酷な弾圧は「斥倭」「反開化」を掲げる初期義兵運動を呼び、朝鮮民衆の旧秩序への回帰要求を強化させる結果をもたらす。大韓帝国ではそうした「下から」の要求のもと「日本新参」を掲げて政務に当たるが、刑罰制度をめぐる厳罰化と刑罰の緩和・教化の間で揺れ動き続ける。そこに介入して「力」と「詐欺」の共闘による日本の植民地化が進められると著者は指摘する。

第2章「朝鮮植民地戦争の時代」では、朝鮮植民地戦争全体の流れを概観している。明治維新以降、朝鮮の支配権をめぐる清国と対立する日本は、1894年の甲午農民戦争を機に日清戦争を起こす一方、東学農民軍への徹底した武力弾圧を行う。1904年の日露戦争後には朝鮮各地の抗日義兵戦争に対する弾圧が展開され、その様相はまさに「朝鮮版植民地征服戦争」であったと著者は指摘する。1910年の韓国併合後も朝鮮では抵抗運動が続くが、日本は三・一独立運動への武力弾圧、さらには1920年の間島虐殺などの軍事行動を展開した。日本は朝鮮を植民地化し、その支配を維持するために軍力を行使し続けたが、この過程で、日本軍は植民地支配の理論と手法を蓄積し、1923年の関東大震災時の朝鮮人虐殺につながると著者は論

じている。

第3章「蓄積された植民地戦争経験①——その理論と手法」では、朝鮮植民地戦争における経験がどのように日本軍に理論化され、手法として蓄積されていったかを検討している。著者は、日清・日露戦争時の日本軍守備隊の朝鮮での戦時編制がそのまま平時編制とされ、朝鮮民衆の抗日運動を「暴徒」と位置づけ「守備」「治安維持」の名目で徹底弾圧を加える一方、在地社会に村落連座を徹底して抵抗への恐怖を扶植することで、「殲滅」と「連座」の論理を創出したと指摘する。さらに弾圧における民衆殺害を「やむを得ず発砲」「正当防衛」論により正当化し、多くの殺害を容認する状況を生んだと論じている。そして、こうした理論と手法にもとづく軍事暴力は、外部からの批判を気にして「表面」では抑制的な姿勢を示すも「裏面」では是正されることなく継続していたと指摘する。

第4章「蓄積された植民地戦争経験②——日本軍隊の植民地戦争経験」では、日本軍隊指導層および郷土部隊の植民地戦争経験が、抗日運動の状況や当時の世論、シベリア戦争や三・一独立運動などとの関連を通じて、いかに深く広範に蓄積されていったかを検討している。著者は、各師団の所属連隊ごとの朝鮮への派遣歴の分析を通して、特定の地域の部隊が繰り返し朝鮮に派遣され、植民地支配の経験を深く蓄積していった様子を明らかにしている。それと連動して各地の郷土新聞も「暴徒殲滅」を扇動する報道を繰り返し、日本の朝鮮支配の正当化と朝鮮人蔑視観が地域社会にまで浸透していたと指摘する。さらに朝鮮における軍隊の配置が「集合」と「分散」を繰り返していたことに注目し、平時においても日本軍が抗日運動に一貫して危機意識を持っていたと述べている。

第5章「義兵と朝鮮社会」では、後期義兵の

活動と参加層の変化、義兵と朝鮮社会との関わりなどについて論じている。著者は後期義兵の特徴として、在地士族が主導していた初期義兵から平民中心へと変化していった点を挙げている。統監政治による生活世界の変貌や軍事暴力に反発した幅広い階層の民衆が義兵に参加し、各地の義兵と結合しながら抗日闘争を組織的に展開したが、彼らを「賊徒」「暴徒」と見なし徹底弾圧を展開する日本軍・憲兵隊（および「親日派」）の前に衰退を余儀なくされる。その過程で後方支援を得るのが困難となった義兵が盗賊化するなど「食うための義兵」化が起これ、次第に社会から「賊徒」視され孤立を深めていくが、韓国併合後も韓鳳洙や蔡應彦のような義賊的な性格を備えた平民義兵将のもと抵抗は散発的に続けられたと指摘する。

第6章「「不穏」から「騒擾」への予兆——武断政治期後半における兵站保護と朝鮮民衆」では、武断政治の開始から三・一独立運動に至る間の「静穏」とされることの多い時期における日本側官憲と朝鮮民衆の緊張関係の広がりについて検討している。朝鮮の兵站化に向けた道路改修や鉄道建設に伴う土地収奪や強制夫役に朝鮮民衆の不満は募ったが、憲兵警察は彼らの妨害行為を過酷に取り締まった。さらにシベリア戦争への出兵に伴う鉄道での兵站輸送が始まると、憲兵警察と朝鮮軍は鉄道沿線での過剰なまでの警戒活動を展開した。著者は、それらの実態の多くは朝鮮民衆の「日常」の延長にあるものであったが、それらは不可視化され「戦闘」＝抗日的実践の側面ばかりが強調されたという事実を明らかにしている。そして、こうした過剰な取り締まりにより「静穏」から「不穏」への転化が起これる中で三・一独立運動を迎えるに至ったと論じている。

第7章「関東大震災時の朝鮮人虐殺——発揮された植民地戦争経験」では、関東大震災時の

朝鮮人虐殺を日本の朝鮮植民地戦争経験との関連の上に再検討を試みている。著者は、朝鮮人虐殺を主導した多くの日本人が植民地戦争の経験を蓄積していた点、「朝鮮人暴動」の流言が流布された背景に植民地戦争の過程で日本人によってイメージ化された「暴徒」「不逞鮮人」という差別と敵意が強く存在した点、軍隊や警察が流言を官民に信じ込ませる役割を担った点、日本政府が国家や官憲の責任を回避すべく隠蔽工作と自警団への責任転嫁、殺害の「正当防衛」化を図った点などを明らかにしている。そして、これらはいずれも植民地朝鮮で蓄積された、「暴徒」「殲滅」の軍事暴力と、「やむを得ず発砲」「正当防衛」論でそれらを正当化してきた植民地経験の延長線上に捉えられると指摘する。

終章「終わらない朝鮮植民地戦争」では、これまで検討してきた内容を整理した上で、日本の朝鮮植民地支配の傷跡が現代社会に及ぼし続ける影響について述べている。著者は、日本の朝鮮植民地支配の延長線上に起こった関東大震災時の朝鮮人虐殺について、実際の虐殺行為、日本政府の事後処理の不誠実さ、さらには近年における歴史改ざんの動きなどにより「朝鮮人は三度殺されている」と述べ、改めて「植民地戦争」という視点から日本の朝鮮植民地支配という問題を再考する必要性を問うている。一方、朝鮮植民地戦争の経験は、朝鮮内に「親日派」を生み出し、「植民地土兵」によって解放後の南北朝鮮に「文尊武卑」から「武尊文卑」の政治体制への転換がもたらされ、同胞に対する「殲滅」と「連座」の迫害が繰り返されるなど、その後の朝鮮社会に及ぼされた影響も指摘している。

2 本書への所感

著者の業績について評者のような浅学が書評

を書くのは甚だ力不足な感が否めないが、本書を通読した所感を述べさせていただく。本書の主たる研究成果は、やはり「植民地戦争」という定義のもとで日本の朝鮮植民地支配の本質的性格を明らかにするとともに、それらが日本や朝鮮の社会に与えた（与え続けている）影響について考察している点であろう。

冒頭、著者は関東大震災時の朝鮮人虐殺で用いられた「不逞鮮人」という言葉の背景にある「朝鮮人に対する潜在的恐怖感」がジェノサイドにつながるものであったとし、そこから日本の排外主義の根底にある差別意識の構造とその歴史的変遷を明らかにすることの意義について問題提起する。著者は、日本政府の報告書や軍の記録をはじめ、新聞記事、さらには個人の回顧録など、さまざまな史資料を用いて実証的な検討を進め、日本の朝鮮植民地支配の実態を究明しようと試みている。この過程で注目すべきは、それらを個々の事象として捉えるのではなく、朝鮮の植民地化と植民地統治下における日本の軍事暴力と朝鮮民衆の抵抗運動を長期的かつ複合的な視点から分析し、その連関性を明らかにしていることである。そして、その一連の過程の中で、日本の支配に抵抗する朝鮮人をすべて「暴徒」「不逞鮮人」と見なし、圧倒的な軍事力をもって苛烈な弾圧を正当化する論理と手法が蓄積され、それらは植民地戦争を経験した軍人、さらには日本社会に広く共有され浸透した。そうした状況下で起こった関東大震災時の朝鮮人虐殺は、決して突発的な出来事ではなく、すべては植民地戦争の経験との連続性の上に起こるべくして起こった事件であるとの著者の指摘は、過去の蛮行を省察もせず排外主義が繰り返し横行している現在の日本社会に直視しなければならない問題を投げかけている。

韓国併合から三・一独立運動に至る時期における取り締まりのあり方を分析した点も興味深

い。著者は、朝鮮の兵站化に向けたインフラ整備への妨害行為に対する取り締まりの強化に注目し、とりわけシベリア戦争と関連した鉄道輸送の増加に伴う日本側官憲の警戒と取り締まりの強化の内容を分析している。そして、同時期にあっても日本側と朝鮮民衆の間に緊張関係が醸し出され、そうした圧力に対する朝鮮人の不満と反発が、彼らをして三・一独立運動を起こさしめる要因を形成したと論じる。既存研究の評価に疑問を呈して再検討を試みた著者のこの指摘は、植民地朝鮮下における決して「静穏」ではない日常的な暴力の存在の一断面を浮き彫りにしたと言えよう。今後、朝鮮総督府関係者や地方高官らの警護のあり方、主要植民地行政官庁付近の警備体制、朝鮮民衆の往来筋での言動に対する監視と取り締まりなど、植民地下での日常的な警戒と取り締まりの実態についての検証を進めることで、さらに具体的な緊張関係の様相にアプローチできるものと評者は考える。

朝鮮植民地戦争の経験が現代の韓国社会に及ぼした影響として著者が挙げている「親日派」の問題についても触れておきたい。著者は、朝鮮王朝の統治理念である儒教的民本主義に基づいた「文尊武卑」の統治のあり方が、日本の朝鮮植民地化過程で軍事暴力による武断的なそれ

に取って代わられるが、それは「親日派」である「植民地土兵」によって継承され、解放後の朝鮮社会に「文尊武卑」から「武尊文卑」の政治体制への転換をもたらしたと指摘する。解放後の済州島四・三事件、朝鮮戦争、さらには朴正熙や全斗煥の軍事独裁政権などを見ても、日本の朝鮮植民地経営の経験が、解放後の保守層に軍事優先主義的な政治運営を展開させるのに少なからぬ影響を及ぼしたことは間違いない。ただ、そうした勢力の軍事優先的な政治運営の展開が現代の韓国社会に受容され定着したかと言え、決してそうではないだろう。軍事力をもって国民を従わせようと戒厳令を発動した尹錫悦が国民の反対運動の前に罷免されたことは記憶に新しいが、民主化運動を経験した韓国社会にあつて「武尊文卑」の政治体制に対する反発と抵抗の中には民本主義的な伝統が生き続けているのではないか。そうであればこそ、現代社会に深い傷跡を残し続ける朝鮮植民地戦争という著者の問いに、我々は真摯に向き合い続けなければならないだろう。

(愼蒼宇著『朝鮮植民地戦争——甲午農民戦争から関東大震災まで』有志舎、2024年7月、ix + 387 + 21頁、定価：本体3,600円＋税)

(いとう・しゅんすけ 福島大学経済経営学類教授)